櫻園通信 41. 平成 29 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院の思い出　1　空襲

久保田嘉一郎
養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

板橋在住の久保田さんが、自分史を書かれていて、その中で戦中戦後の旧養育院の様子について書かれたとの事で原稿を拝見した。昭和 20（1947）年 4 月の空襲のこと、進駐軍が来たときのこと、昭和 24 年の昭和天皇行幸のことなど、子供の目で見た当時の様子が書かれている。櫻園通信への掲載の了解いただいたので、3 号に分けて掲載することにする。

その頃の養育院のあらましについて述べる。

関東大震災後、大塚から板橋に引越をした養育院本院は、鰥寡孤独の収容、授産事業、保育、感化事業などの社会事業を活発に行い、昭和１８年度末には分院を含めて 1,702 人の入所者がいた。昭和 19 年に、戦時疎開のため、塩原温泉に疎開施設を作り、本院利用者の半数、房総の船形学園の子供たちを疎開させた。食糧難の時代に苦しい対応を迫られた。養育院 80 年史によれば板橋の本院には、養育院利用者の半数と、離島小笠原や八丈島住民の疎開を受け入れていた。戦局の押し迫る昭和２０年 4 月 13 日には米軍の東京大空襲に引き続き、東京北部のＢ29 による空襲があった。当時の板橋養育院本院には、疎開島民 725 名を含めて 1599 名が生活していたが、施設の 9 割が灰燼に帰し、利用者 107 名が死亡した。この頃、養育院の男性職員の多くは召集され、看護婦、寮母主体の施設運営であったようである。このときの板橋住民の様子が、大久保氏の手記に詳しい。

東京都の焼夷弾による無差別爆撃で、1945 年だけで終戦までに 35 波の空襲で、100,632 以上の死者が出ている。焼夷弾による、無差別爆撃で、軍事基地、軍需工場のみでない。養育院の罹災は、戦時の東京のこのような状況の中での一こまである。大久保氏の手記には、子供の目でこのころのことが記載されています。

（センター顧問医　稲松孝思）

昭和二十年四月のわが家の状況

私は昭和十五年三月に十人兄弟（八女二男）の家に生まれました。下から数えて二番目でした。大正八年生まれの長女夫婦と三歳の女の子一家も同居して大家族でした。

長女夫婦の夫（義理の兄）は出征中でした。わが家は製麩業（焼き麩の製造と販売）を営んでいましたが、原料である小麦粉が手に入らず休業中でした。店舗と二階建ての住宅と工場とが川越街道に面したわが家でした。

昭和二十年四月頃のわが家は、四女の姉は板橋高等女学校三年生でしたが、陸軍造兵廠に勤労動員されていました。六女の姉は板橋第六国民学校五年生、長男の兄は三年生でともに水上温泉で学童疎開中でした。七女の姉は学齢になりましたけれども、板橋第六国民学校は休校状態で入学できずにやむおえず、母の出身地である長野県飯山市の母の実家に寄留して、地元の国民学校に入学しました。

住み込みの男性もいましたが出征中でしたから、この時に大人の男は当時五五歳の父ひとりでした。防空壕は工場内に一つと川越街道の歩道部分に十人位は入れる防空壕がありました。

当時五歳になったばかりの私ですが、空襲の記憶はあります。空襲警報のサイレンの音や闇夜に光る探照灯（サーチライト）の光芒やB-29の機体とゆっくりと落ちてくる照明弾などです。空襲が激しくなると一階の座敷は畳を上げて土足で出入りしていました。夜も衣服を着て寝ていました。昼間も空襲はありましたが、艦載機P-51によるもので機銃掃射されるおそれがありました。

川越街道の中丸町寄りのタクシー会社の万年塀には機銃掃射の跡が私の中学校時代まで残っていました。

ある夜、大規模な空襲がありました。足の悪い母と私は父の引くリヤカーに乗って布団をかぶって避難しました。行先は川越街道を下って下頭橋方面でした。下り坂の途中に左に見える建物が燃えていました。「日大病院が燃えている。」と父が叫びました。幸い、その夜は家も家族も無事でした。日大病院とわが家は直線距離にしておよそ三百メートル、B-29から投下された焼夷弾がわが家を直撃するおそれは大いにあったのです。わが家が焼け残ったのは偶然の結果と言えます。

この夜の記憶をもとに板橋公文書館（旧板三小）で調べたら、この日は板橋区にとっては大変な日であったことが分かりました。昭和二十年四月十三日の夜の空襲で板橋区役所、板橋駅、氷川神社、養育院、日大病院などが焼失したと記録にありました。

縁故疎開

空襲の危機が迫ると、家にいる幼い子供を安全なところへ疎開させようと両親は考えました。両親が考えたのは父方の祖父の出身地である長野県飯田市近郊です。昭和二十年五月、疎開の依頼をするために両親は飯田に行きました。私も連れってくれました。その時の旅行の思い出は断片的に覚えています。夜行列車は混んでいましたが、両親の間に座ることが出来ました。列車の窓は板で打ち付けられて車内の光が漏れないようにされていました。前の席の人が水筒で水を飲むのを見て、私も水を飲みたいと言って、呑ませてもらいました。

疎開の願いは、一軒目は断られ、一里（約四キロ）離れた二軒目は引き受けてくれました。その時にご馳走になった手打ちうどんはおいしかったです。その時に母に言われた一言を覚えています。「カイチロ、今日はよく歩いたね。」私は大きな下駄を履いていました。疎開するのは、長女の姉（当時二五歳）と姉の子（三歳）、私（五歳）、妹（三歳）の四人でした。生活する場所は農家の庭に立っている物置の二階の座敷でした。自炊が条件でした。

疎開生活は六月に始まり、終戦を挟み十一月まで続きました。東京に帰ってきて、家族の面々がそろって大きなテーブルで夕食を食べました。出てきたのは「すいとん」。母に「ご飯ないの？」と聞きましたら、「今のがご飯よ。」と言われたのを覚えています。疎開先では何とかご飯（米）を食べることが出来ましたが、東京の食糧事情は悲惨でした。

翌年、昭和二一年四月に板橋第六国民学校に入学しました。

空襲の跡がのこる養育院の敷地と渋沢栄一銅像

養育院の思い出　2
米軍の進駐

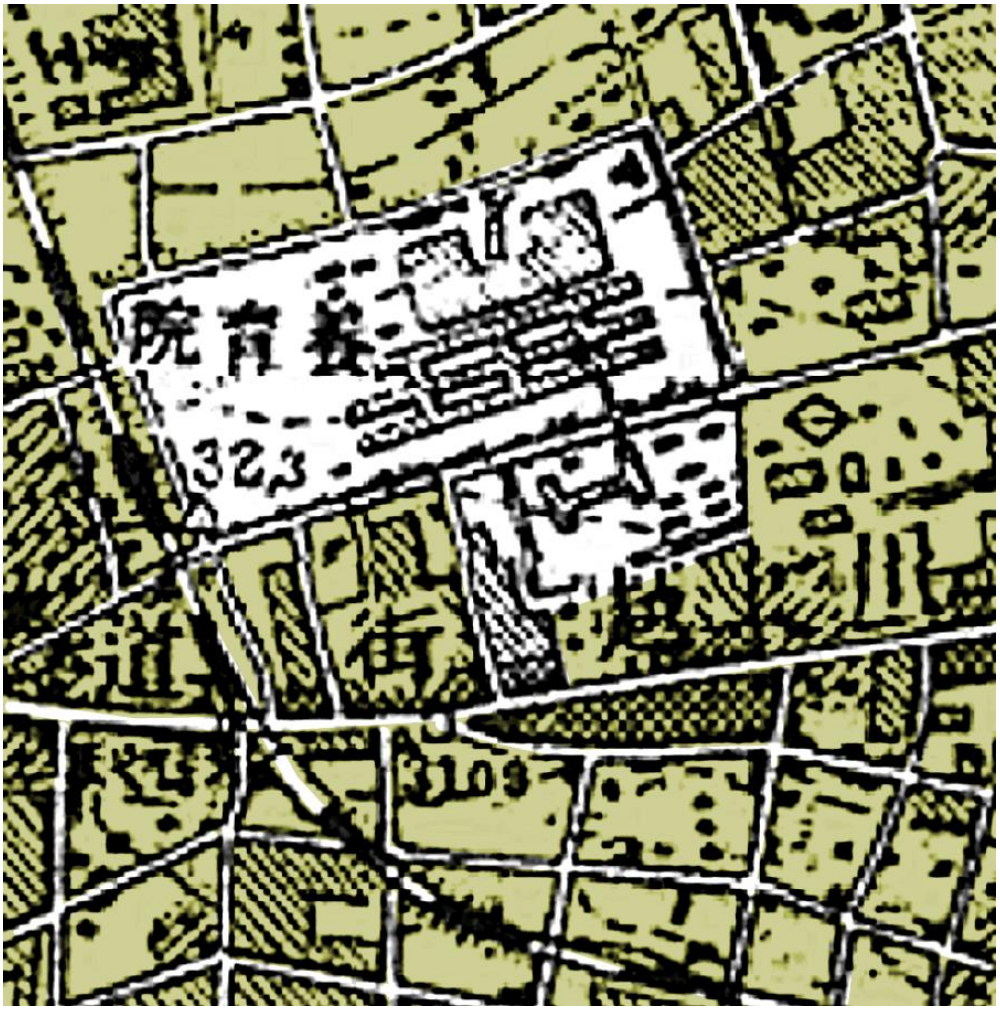
櫻園通信 42.　平成 29 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

久保田嘉一郎　養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

養育院の広場で初めてダンプ・トラックを見た

昭和二十年九月に米軍の進駐が始まりました。わが家は川越街道に面していましたから、米軍の動きが分かりました。米軍の進駐先は朝霞の広大な陸軍予科士官学校跡地と決めて、兵士、車輌、戦車などの移動に川越街道を使いました。夜中に戦車がごうごうと移動するのを寝床で聞きました。基地は「キャンプ・ドレイク」と名付けられました。現在の光が丘公園（練馬区）のあるところは「グランド・ハイツ」と名付けられて米軍将校用の宿舎となりました。

昭和二一年春になると米軍は板橋区、北区にある陸軍造兵廠などの武器、兵器、弾丸などの軍需品の処分を始めました。私が目撃したのは養育院の広場です。当時の養育院は私の記憶によれば、かなり変わっています。



現在、健康長寿医療センターの正門前は片側二車線の大きな通りですが、当時は違いました。東上線踏切から板一中横を通って板橋区役所への道は千川上水を暗渠化してできた道でした。渋沢栄一像も板一中の近くにありました。当時の養育院への車の出入りは旧川越街道から今の板橋文化会館の前を通っていました。

処分の様子を私は三歳上の兄に連れられて見に行きました。米軍のトラックが兵器や軍需品を運んで来て、荷台を傾けると荷物がザァーと地面に落ちました。初めてダンプ・トラックを見ました。周りの人々も皆ビックリしていまし

た。アメリカは凄いものを持っているなぁーと見ていた人たちは目を見張りました。見張り役は米軍のＭＰ（憲兵）二人が銃を持ってガードしていました。大人が近づくと銃で制止されたが、子供には甘かったです。

どんな物を処分していたのか？軍関係の雑多な物を処分していました。歩兵銃、銃剣、火薬のない大砲の弾丸、機関銃の弾、通信機などです。ある程度溜まるとガソリンかけて火をつけて燃やして処分して、次の荷物を迎える。

兄と私は連日、見物に行きました。ＭＰの隙を見て、一人の子供が荷物に近づき、物を取ってきました。その成功を見て、子供たちは荷物に近づき、それぞれ物を盗みました。私たち兄弟もそれに倣い、いろいろな物を盗みました。米兵の警戒が厳重になる前まで続きました。〝戦利品〟としては、銃剣二振り、大砲の砲弾数個、弾丸ケース（鉄製）、通信機、屈折双眼鏡（偵察の時に使う）などがありました。

そんな中に厳重に梱包された木の箱がありました。大きさはミカン箱位の大きさでした。それを兄と協力して、家に持ち帰りました。父親がバールで開けて見たら、中にはぎっしり包帯とガーゼが詰まっていました。食料を期待していましたのに、ガッカリしました。

三八式歩兵銃も沢山焼却されました。木製の銃架は焼けますけれど、銃身は残ります。やがてその焼けた銃身を地面に差し、鉄条網をぐるぐる巻いて子供たちが近づけないようになりました。

〝戦利品〟のその後について話します。工場の隅に隠していましたが、昭和二五年六月に朝鮮戦争が勃発して、世の中が変わりました。占領軍司令官のマッカーサー元帥の指令に基づき警察予備隊を創設しました。日本は朝鮮戦争で戦う国連軍の補給基地になりました。戦後復興を目指す日本にとっては追い風になりました。「かねへん景気」、「いとへん景気」と呼ばれました。「かねへん景気」とは、金属関係の会社が景気が好くなり、「いとへん景気」とは、繊維産業の会社の景気が好くなることです。

街には「くず鉄屋」が存在して、金属類を目方で買ってくれました。当然、鉄より銅や真鍮は高く買ってくれました。鉄を高く買ってくれるぞという噂が広まり、兄と相談して屑鉄屋に持って行き、全部売ってしまいました。

台座から降ろされた渋沢栄一銅像

敗戦後全国に、米軍を中心とした連合軍が進駐した。板橋の養育院は明々寮などの一部のみが使用可能で、急遽焼け残っていた練馬の兵舎をも使用し、昭和 22 年には延べ 4,402 人の収容者を抱えていた。焼け跡の広場は、近辺の軍需工場などの武器の処分場の役割を果たした。米軍のダンプ・トラックが旧軍の銃などの兵器を次々と運び込み、子供の目には機械化された米軍の様子が新鮮に見えたようである。

渋沢銅像は、昭和 19 年に金属回収のために地上に降ろされ、「渋沢栄一の応召」として、写真入で新聞報道されている。しかし降ろされた巨像は、運搬条件の厳しい中で、ボイラー横の防火壁の傍らに温存されていた。（櫻園通信 20 号）。別の住人の話であるが台の上には焼け焦げのコンクリート像があり、地上には降ろされて供出を待っていた銅像があった。子供心にどうして 2 つも似たものがあるのかと不思議に思ったそうである。戦後養育院はこの跡地での再建を望んだが、板橋区は養育院を追い出して、区の施設を建てる計画を立て，両者の激しい論争が繰り返された。

（センター顧問医　稲松孝思）

養育院の思い出　3
昭和天皇の行幸

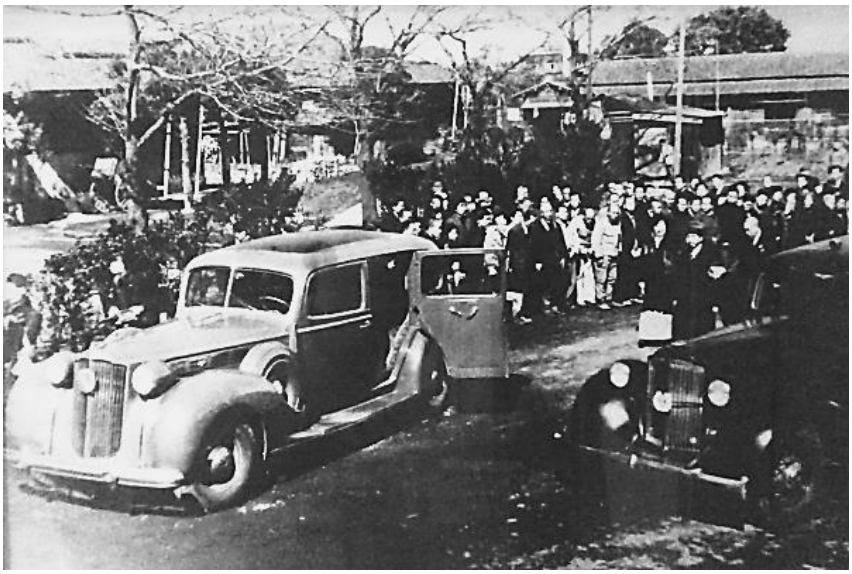
櫻園通信 43.　平成 29 年 4 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

久保田嘉一郎
養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

養育院で昭和天皇をお迎えする

現在の東京都健康長寿医療センターの二階には、「養育院・渋沢記念コーナー」があります。私は一枚の写真に注目しました。それは戦後すぐに行われた昭和天皇、皇后両陛下の養育院への行幸の写真です。母と私は、写真には写ってはいませんが、その場にいました。

私の記憶によれば、小学校低学年の時、母に連れられてと近所のおばさんたちと養育院を訪問される天皇陛下をお迎えしました。その日はいつかを知りたくていろいろ努力しました。国営昭和記念公園にある昭和天皇記念館にも行き調べました。戦後の全国巡幸の事は分かりましたが、養育院への行幸は判りませんでした。ところが、「昭和天皇実録」が完成して一般公開しているとの記事が新聞に報じられました。一般公開は皇居東御苑のある宮内庁書陵部庁舎で行われていると聞き、早速出かけました。（平成二六年十月九日）

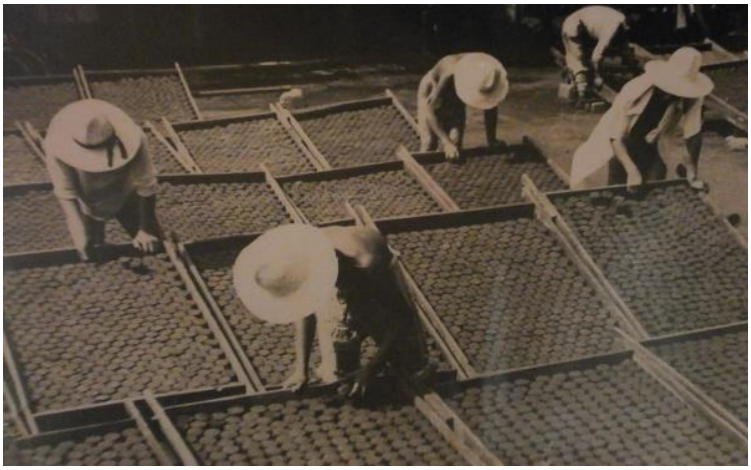


一時間位待って、私の番になりました。閲覧室に入ると、長いテーブルに「昭和天皇実録」全六一巻が備えてあり、閲覧者は二名でした。そんなセットが四つ、計八八名が一時に閲覧出来ました。閲覧時間は四十分でした。私の目的は、昭和天皇の養育院への行幸の日と内容を知ることです。簡単に分かりました。コピーや写真禁止ですから、書き写しました。

昭和二四年三月一日（火）東京都内社会事業施設の御視察の為、午前九時四十分皇后をともに御出門になり、初めに板橋区の東京都養育院を御訪問になる。院長事務取扱い磯村英一（東京都民生局長）より東京軍政部福祉課長キャローの紹介を受けられ、キャローに御握手とお言葉を賜う。○殿において磯村院

長事務取扱いの奏上をお聞きになる。終わって高齢者収容施設である、明々寮及び炭団工場を御視察になり、お言葉を賜う。ついで豊島区の東京都中央児童相談所に向かわれる。
（文中の○は急いでメモした為、判読できず。）

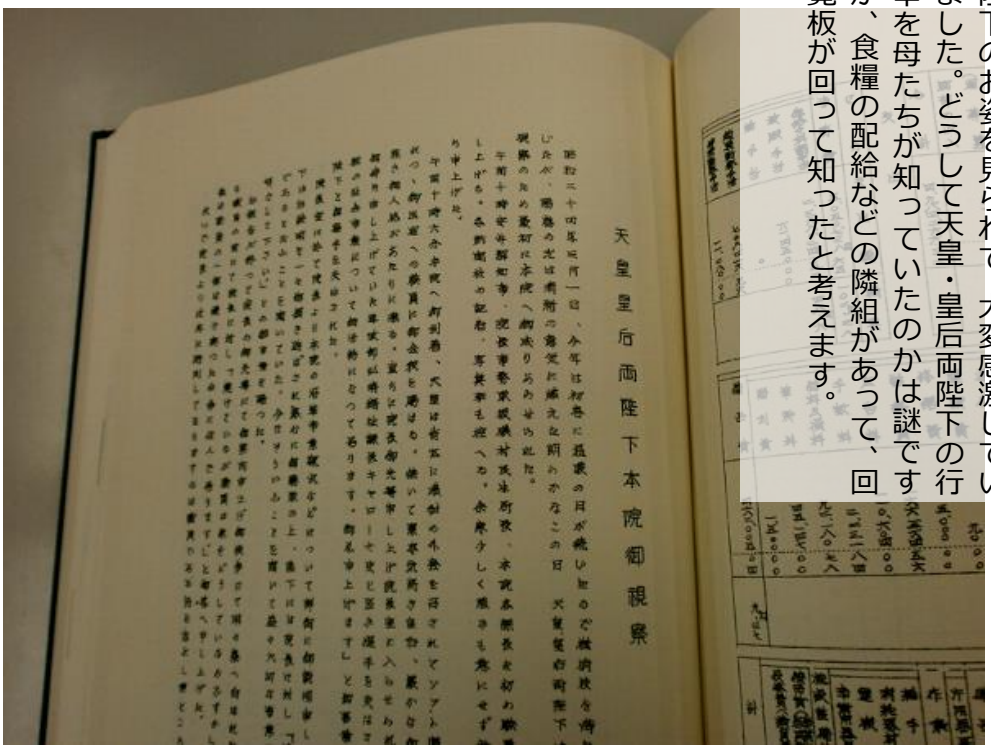
私が知りたいと思っていた月日が、昭和二四年三月一日（火）と判明した。皇居を九時四十分にお車で出発された天皇皇后両陛下の養育院到着は正午前と思われる。平日の昼間に板六小三年生の私がどうして養育院にいたのか、不思議に思いますが、その頃は二部授業でした。急



養育院での炭団づくり

増する児童に教室が足りずに私の在学中にも板九小、板十小、大山小が造られています。

天皇、皇后両陛下も数人の侍従を連れられて、私たちの目の前を通られました。今ほど厳重じゃなかったです。ほんの一メートル先を、中折れ帽を手にして両側に挨拶されて通られました。迎える人もそう多くはなく、母は天皇、皇后両陛下のお姿を見られて、大変感激していました。どうして天皇・皇后両陛下の行幸を母たちが知っていたのかは謎ですが、食糧の配給などの隣組があって、回覧板が回って知ったと考えます。



天皇皇后両陛下本院御視察
東京都養育院月報　第 448 号
（昭和 24 年 4 月発行）
復刻版東京都養育院月報
第 2 巻　不二出版 2016 より

復刻版東京都養育院月報
【明治期全 6 巻】1-143 号 1901-1913 年
【大正期全 12 巻】144-305 号 1913-1926 年
【昭和期全 12 巻】306-425 号 1927－1938 年
【戦後編全 12 巻】426-586 号 1946-1964 年
は、当センター内の老年学情報センターで閲覧することができます。

昭和天皇は明治三四年（1901）四月二九日生まれ、母は明治三四年三月二三日生まれです。この時は四八歳でした。

戦後、戦災孤児や海外からの引揚者も受け入れ、昭和 21 年度末の在籍者は 2,272 人に上っている。当時、GHQ の占領政策で、ララ物質による援助が行われた。アメリカの福祉施設慰問団も度々が訪れている写真が残されている。

戦後、昭和天皇は全国を行脚したが、昭和 24 年 3 月 1 日には、板橋の養育院にも行幸された。利用者、従業職員にも親しくお言葉をかけられた模様は、養育院月報に記載されている。当日、安井都知事、磯村民生局長、GHQ 軍政部厚生福祉課長のキャロー女子らが、案内している。久保田氏の手記には板橋を訪れた昭和天皇の様子が書かれている。養育院を板橋の現地に再建するか否か、板橋区の行政当局と激しい論争が行われ、膠着状態に陥っていた。しかし、行幸の翌月、キャロー女史の鶴の一声で、再建に関する養育院と板橋区の論争は決着し、敷地の一部を区の学校や公園、文化施設に提供し、養育院の板橋再建が決まった。当時の福祉施設を巡る占領政策を含めての政治状況が興味深い。

（センター顧問医　稲松孝思）

櫻園通信 44. 平成 29 年 8 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一の健康法
坂本屈伸道

宮本孝一　老年学情報センター

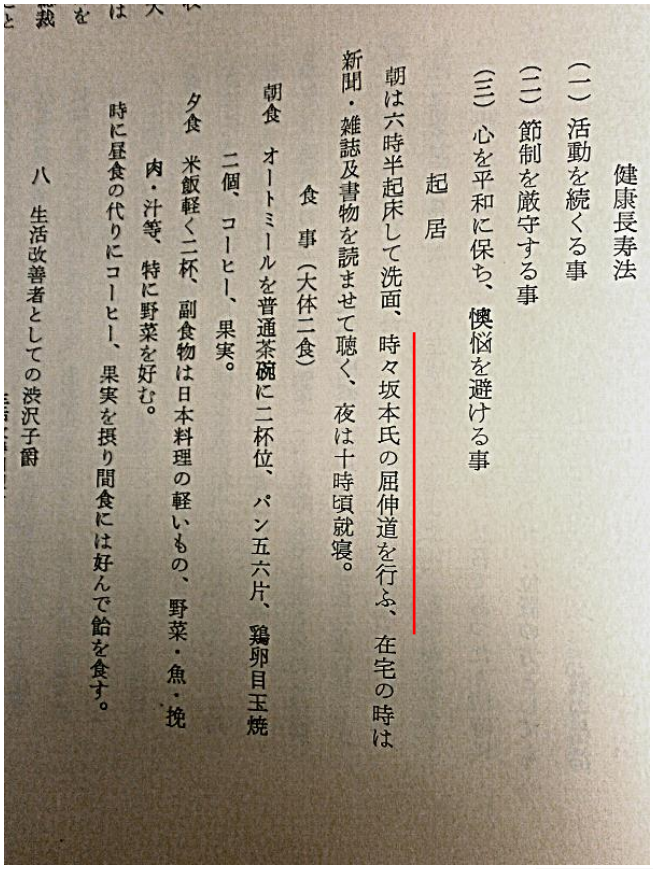
渋沢栄一が**八〇代**で始めた健康法があります。柔術家坂本謹吾が提唱した健康体操「坂本屈伸道」です。

渋沢栄一はときどき坂本を自宅に呼んで、熱心にこの体操を実践したと言われています。

一九二九（昭和四）年に出版された坂本謹吾の著書「坂本屈伸道」では、渋沢栄一自らの実演写真を掲載して推奨しています。

渋沢栄一伝記資料四九巻には、最晩年の日課として次のように書かれています。

「朝は六時半起床して洗面、時々**坂本氏の屈伸道**を行ふ。在宅のときは、新聞・雑誌及書物を読ませて聴く。夜は十時頃就寝。」



健康長寿法

（一）活動を続くる事

（二）節制を厳守する事

（三）心を平和に保ち、懊悩を避ける事

起　居

朝は六時半起床して洗面、時々坂本氏の屈伸道を行ふ、在宅の時は新聞・雑誌及書物を読ませて聴く、夜は十時頃就寝。

食　事（大体二食）

朝食　オートミールを普通茶碗に二杯位、パン五六片、鶏卵目玉焼二個、コーヒー、果実。

夕食　米飯軽く二杯、副食物は日本料理の軽いもの、野菜・魚・挽肉・汁等、特に野菜を好む。

時に昼食の代りにコーヒー、果実を摂り間食には好んで飴を食す。

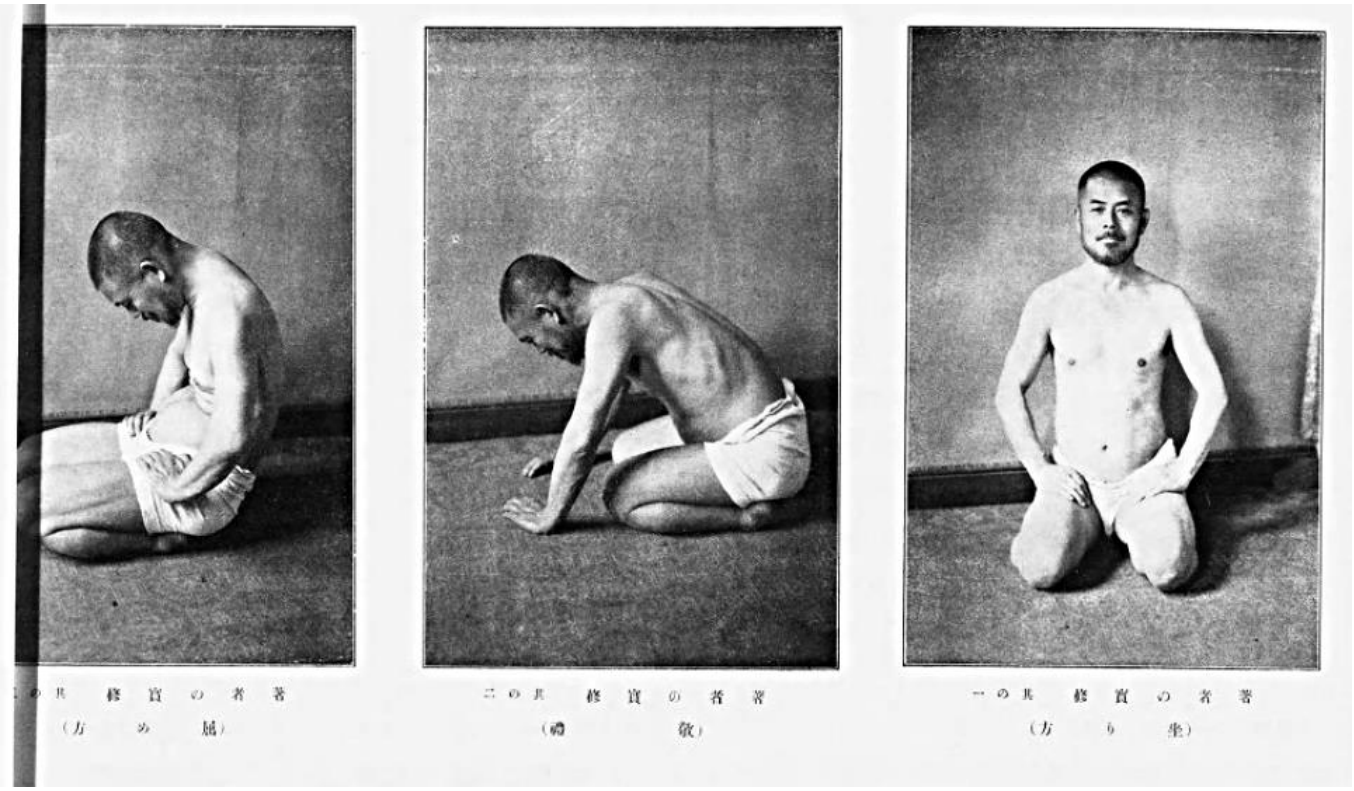
八　生活改善者としての渋沢子爵

二の其　業修の爵子澤渋

一の其　業修の爵子澤渋

坂本謹吾著「坂本屈伸道」に掲載
坂本屈伸道を実演する渋沢栄一の写真

坂本謹吾著「坂本屈伸道」



正座で座り、上体をゆっくり前に倒してお腹を最大限へこませる、次に、腹のへこみを戻しながら上体を起こして首だけ後ろにそらせる体操。

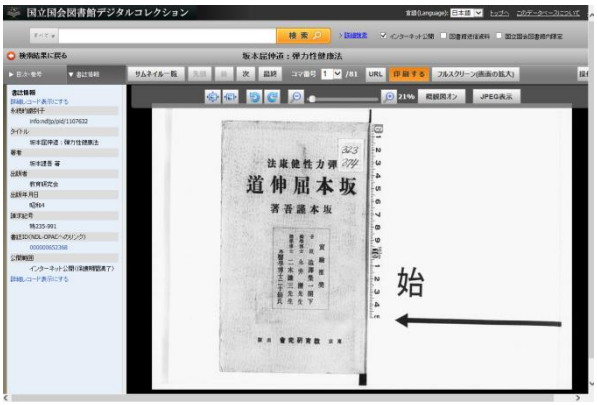
立って同じような動作をする方法もあり。

これを五～十回繰りかえすだけ。朝晩行うことが効果的といいます。

ポイントは腹。めいっぱいへこませてはゆっくり戻すという繰り返し。これにより全身の血行を良くして心身の調子を整えるのだそうです。腹をアコーディオンの蛇腹のように動かして、全身の血行をよくするというイメージかもしれません。

現代では、「横隔膜のストレッチ」などと呼ばれる健康体操で坂本屈伸道とそっくりの動作をする場合があるようです。

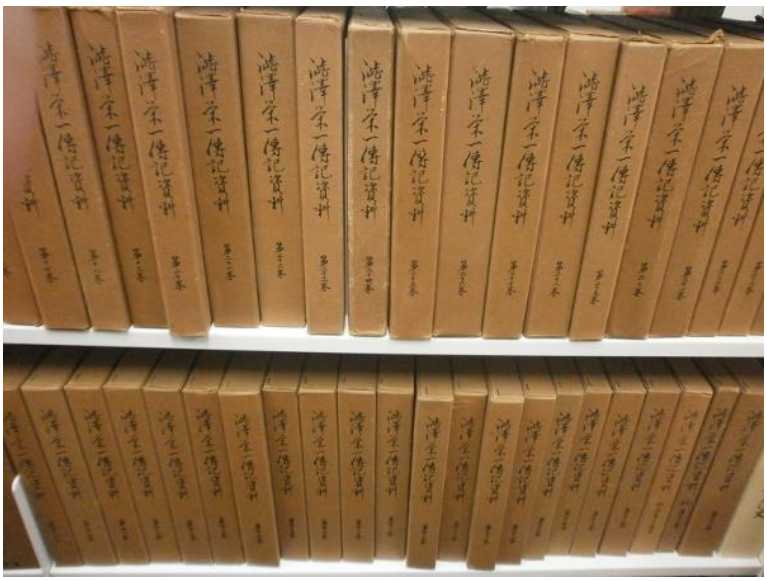
ただし、現代の医学では人体にどんな影響があるのか調べられていないので効果は不明です。



坂本謹吾著「坂本屈伸道」は、インターネットで無料で読むことができます。
→　国立国会図書館デジタルコレクション
http://dl.ndl.go.jp/

渋沢栄一伝記資料

老年学情報センター（東京都健康長寿医療センターの職員用図書館）で所蔵しています。養育院・渋沢コーナー維持ボランティアに加入しますと、養育院の歴史資料や渋沢栄一伝記資料をご覧いただけます。



斎藤家と養育院

宮本孝一
老年学情報センター

櫻園通信 45. 平成 29 年 8 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

1872	明治 5	養育院開設	上野本院	精神病院の分化		
1873	明治 6					
1874	明治 7					
1875	明治 8					
1876	明治 9					
1877	明治 10					
1878	明治 11					
1879	明治 12		神田本院		癲狂院	
1880	明治 13					
1881	明治 14					
1882	明治 15					
1883	明治 16					
1884	明治 17					
1885	明治 18		本所本院		巣鴨病院	
1886	明治 19					
1887	明治 20					
1888	明治 21					
1889	明治 22					
1890	明治 23	1890 渋沢栄一 養育院院長就任				
1891	明治 24					
1892	明治 25					
1893	明治 26					
1894	明治 27					
1895	明治 28					
1896	明治 29		大塚本院			
1897	明治 30					
1898	明治 31					
1899	明治 32			児童収容施設の分化		
1900	明治 33					
1901	明治 34					
1902	明治 35					
1903	明治 36					
1904	明治 37					
1905	明治 38					
1906	明治 39					
1907	明治 40					
1908	明治 41					
1909	明治 42			巣鴨分院（のちの石神井学園）		
1910	明治 43					
1911	明治 44					
1912	大正 元					
1913	大正 2					
1914	大正 3					
1915	大正 4					
1916	大正 5					
1917	大正 6					
1918	大正 7					
1919	大正 8					
1920	大正 9					
1921	大正 10					
1922	大正 11					
1923	大正 12	1923 関東大震災	板橋本院		松沢病院	
1924	大正 13					
1925	大正 14	1925 渋沢銅像建立				
1926	昭和 元					
1927	昭和 2					

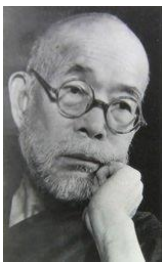
学生芥川龍之介、医師斎藤茂吉と出会う

1919 年から作家芥川龍之介と歌人斎藤茂吉の交流が始まる。

しかしそれ以前に一度、養育院から分岐した病院（巣鴨病院）の中で 2 人は偶然出会っていた。

東京府巣鴨病院

斎藤茂吉



芥川龍之介

1910 東京帝大医科大卒業
1911 医科大付属病院と巣鴨病院に勤務
1914 斎藤輝子と結婚
1916 斎藤茂太誕生
1917 付属病院と巣鴨病院辞職 長崎医学専門学校教授に
1921 欧州留学

巣鴨病院

1910 第一高校入学 同期入学に渋沢秀雄（渋沢栄一の四男）、菊池寛がいる
1913 東京帝大に進学
1914 帝大学生だった芥川龍之介、巣鴨病院と医科大付属病院を見学 この時案内した医員が**茂吉**

長崎

1919 菊池寛と芥川龍之介が茂吉の元に訪れ、交流開始

留学

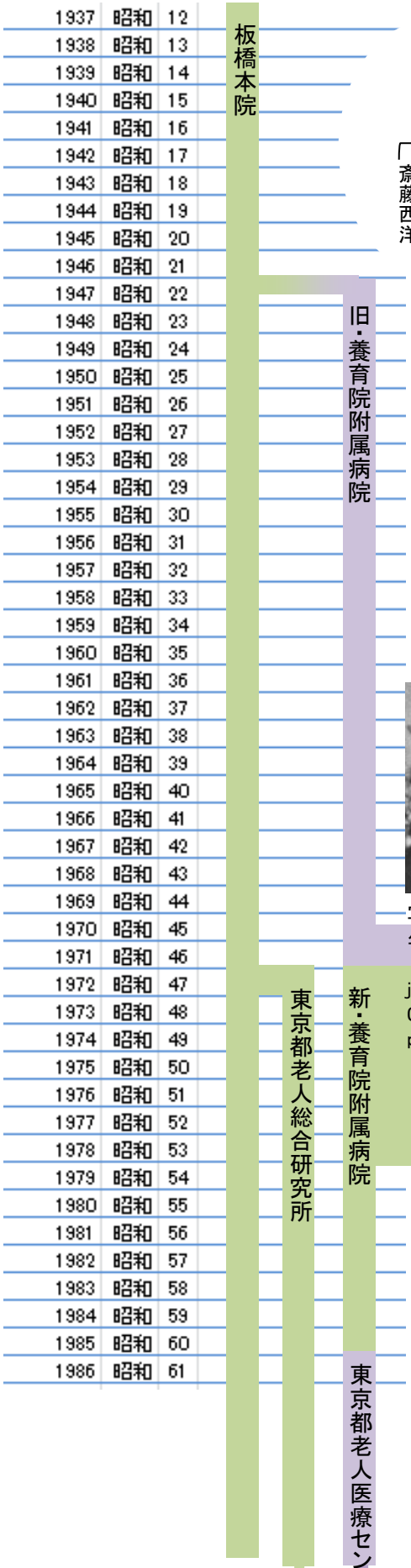
青山脳病院

1925 帰国 青山脳病院全焼
1926 青山脳病院再建
1927 茂吉青山脳病院の院長就任 斎藤宗吉（北杜夫）誕生

1926 神経衰弱で青山脳病院に通院
1927 茂吉が処方した睡眠薬を大量に飲んで自殺

斎藤茂吉の弟
養育院附属病院の副院長に

北杜夫は、叔父（齊藤茂吉の弟）のアルバムをみて信州の旧制松本高校に進学。
北杜夫が憧れた叔父は、のちに（新旧）養育院附属病院の副院長になった。



斎藤紀一
- 斎藤西洋
- 斎藤米国
- **斎藤紀仁**
- 齊藤茂吉（養子）
  - 斎藤茂太
  - **斎藤宗吉**（北杜夫）

1945　旧制松本高校入学

1948 東北大学医学部入学

北杜夫

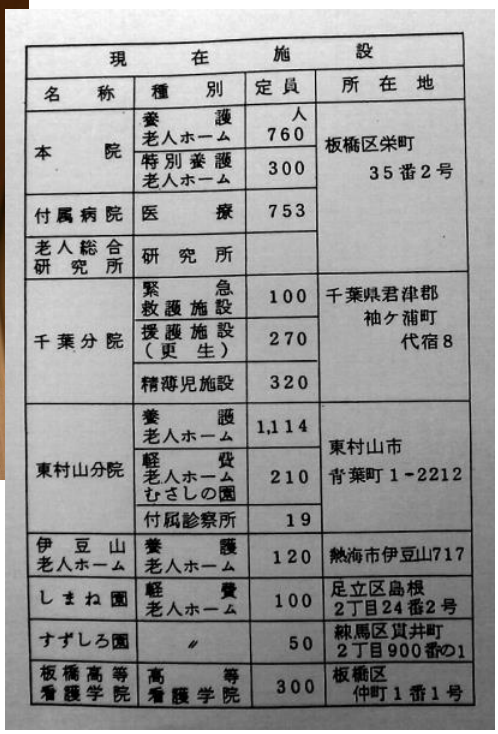
私はいずれ自分が死ぬことを怖れてはいなかった。しかし憧れの白線帽をかぶり、中学とはおのずから別世界であろうせっかく入学できた松本高校に、一刻でもあれ入ってみたかった。**私の叔父**はかつて松高生で、当時は出征していて日本にいなかったが、その残されたアルバムを見ると、私の松本に対する憧れはいやがうえにもかきたてられて行った。残雪を戴く峨ケとした高山や一面のお花畠を背景に、いかにも颯爽とした黒マントを羽織った松高生の写真、それはまだ箱根くらいまでしか旅をしたことのない私にとって、さながら別天地のように思われた。それに加えて、当時昆虫マニアであり、信州には特産の珍種が沢山いた。（北杜夫「母の影」）

参考：竹内 正：松本時代の北杜夫 其の一『寂光』に映された父茂吉の陰影．信州大学附属図書館研究 第 6 号 2016 .p33-77

新・旧 養育院附属病院
副院長 斎藤紀仁

写真：「鶴巻温泉病院 30年尾歴史」より
http://www.sankikai.or.jp/tsurumaki/medical/2009/11/24/30th_history.pdf

「養育院史ノート 1972-4」
当時の養育院施設の事業規模がわかる貴重な史料。養育院・渋沢記念コーナーで展示中。斎藤副院長はこの資料を使って、当時の職員に施設の歴史を説明しました。



現在施設			
名称	種別	定員	所在地
本院	養護老人ホーム	760人	板橋区栄町35番2号
	特別養護老人ホーム	300	
付属病院	医療	753	
老人総合研究所	研究所		
千葉分院	緊急救護施設	100	千葉県君津郡袖ケ浦町代宿8
	援護施設（更生）	270	
	精薄児施設	320	
東村山分院	養護老人ホーム	1,114	東村山市青葉町1-2212
	軽費老人ホームむさしの園	210	
	付属診察所	19	
伊豆山老人ホーム	養護老人ホーム	120	熱海市伊豆山717
しまね園	軽費老人ホーム	100	足立区島根2丁目24番2号
すずしろ園	〃	50	練馬区貫井町2丁目900番の1
板橋高等看護学院	高等看護学院	300	板橋区仲町1番1号

櫻園通信 46. 平成 30 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋澤栄一・養育院・慰霊協会による松平定信公の顕彰

稲松孝思（顧問医）

楽翁公関連講演会の小冊子が「松平楽翁公墓前祭講演記録集」として一冊にまとめられた（平成 29 年）。

渋沢栄一は、「養育院」が、寛政の改革の中で、老中松平定信が定めた七分積金・町会所の制度で得た資金によることを深く感謝し、定信（隠居名・白河楽翁）の顕彰に務めた。

一連の渋沢栄一と養育院による、松平定信公顕彰の活動は、東京都慰霊協会に引き継がれている。

渋沢栄一生前の活動

- 月命日に渋沢が養育院を訪問。安達憲忠幹事らの、現場の人たちと養育院の運営について協議、指示。院の子供たちや利用者にお菓子を配り、話をするなど親しく接する。
- 養育院の守り神として、「吉祥院歓喜天誓願書」の坂本源平元幹事による写しと「渋澤の賛」をひとつに額装し、養育院本院（大塚）と巣鴨分院の院長室に掲げた。養育院本院の額は現存し、養育院・渋沢記念コーナーに展示している。「吉祥院歓喜天誓願書」の現物は、渋沢が当初所蔵したが、桑名の松平家に返却し、松平家の鎮国・護国神社（桑名市）の宝物となっている。なお、白河の松平藩は、文政 6（1823）年、隠居していた楽翁の意向もあり、桑名に移封となっている。
- 墓前祭・明治 43 年 5 月 13 日、第一回楽翁公記念会：巣鴨分院講堂。昭和 6 年まで定例で行われる。（昭和 4 年）以降、松平楽翁公遺徳顕彰会と東京市共催で江東区白河の霊巌寺で墓前祭が行われた。
- 南湖神社（祭神松平定信）：
  白河市の中目瑞男の首唱で、公の偉大な御遺徳を敬慕する白河市民を始め、各地の崇敬者の熱烈な至誠と、渋沢栄一の御尽力により、大正 9 年神社設立が認可され、大正 11 年御鎮座大祭が執行された。
- 松平楽翁公遺徳顕彰会（昭和 4 年 6 月 14 日）徳川家達総裁、渋沢栄一会長、平塚廣義（東京府知事）副会長、堀切善次郎（東京市長）副会長。講演会（三上参次）。展覧会：商工奨励館。
- 昭和 17 年 10.15.創立 70 周年記念式。来会者に「楽翁公心願書」コロタイプ刷り配布。

昭和 6 年 11 月 11 日　渋沢栄一逝去

- 昭和 8 年 5.13.楽翁記念会祭典取り止め。本院にて法要。各分院にて偲徳講話。
- 昭和 11 年 5.13.楽翁公記念会、外部関係者招待、法要、講演「楽翁の人格」（三上参次）。
- 昭和 12 年 5.13.第 27 回記念会、本院。楽翁公記念講演集 1（明治 43―大正 3 年）再版配布。
- 昭和 12 年 11.11.楽翁公伝出版　岩波書店、平泉澄・中村孝也編（生前の渋澤栄一の指示で準備が進められたが出版は逝去後となった。）
- 昭和 15 年 5.13.楽翁公記念会・本院。6.14.楽翁公墓前祭、本所公会堂。記念講演（国府犀東）。
- 昭和 16 年 5.13.楽翁公記念法要。6.14.楽翁公墓前祭、講演会「楽翁公時代の国防」（中村孝也）
- 昭和 17 年 6.14.楽翁公墓前祭、楽翁公を偲ぶ夕（日比谷公会堂）。講演会「経世家としての楽翁公」（中村孝也）。

東京都慰霊協会、養育院による松平定信公顕彰

●昭和 22 年、東京都慰霊協会が設立され、関東大震災、戦災罹災者の慰霊目的である。江東区の旧被服廠跡に、講堂、慰霊塔（三重塔）を有する。あわせて、東京の公共功労者の慰霊も行い、楽翁公顕彰会の行事も、事実上継承していた。昭和 45 年に楽翁遺徳顕彰会は解散し、慰霊協会に行事、財産を引き継いだ。この間・東京都慰霊会で、楽翁公関連講演会が行われ、その内容は前掲の小冊子に編まれた。

●昭和 30 年 5.13.楽翁祭記念講演会「楽翁公と近代日本」（藤井甚太郎）。

●昭和 34 年 5.13.松平楽翁祭､本院挙行(金子吉衛)。

●昭和 41 年 1.22.渋沢敬三が養育院に寄付した渋沢コレクションを東京都公文書館に寄託。

●昭和 41 年 4.28.月刊「楽翁」創刊、利用者報のタイトルとなったが、内容的には楽翁への言及は少ない。

松平定信墓・霊巌寺（江東区白河）

白河市南湖神社前の楽翁銅像

楽翁公記念講演集
1－4 巻

楽翁公記念会講演集目次

第１巻（明治 43 年～大正３年）

松平楽翁公頌徳の辞	安達憲忠
松平楽翁公と三日月池	安達憲忠
青年時代における楽翁公の逸話	江間政發
松平楽翁公頌徳の遺徳	渋澤栄一
楽翁公と青年の育成	井上友一
松平楽翁公入閣当時の事情	江間政發
松平楽翁公に就いて	渋澤栄一
松平楽翁公に就いて	阪谷芳郎
松平楽翁公の逸事について	三上参次
楽翁公の逸事について	富士川遊
七分金の由来	安達憲忠

第２巻（大正４年～大正 10 年）

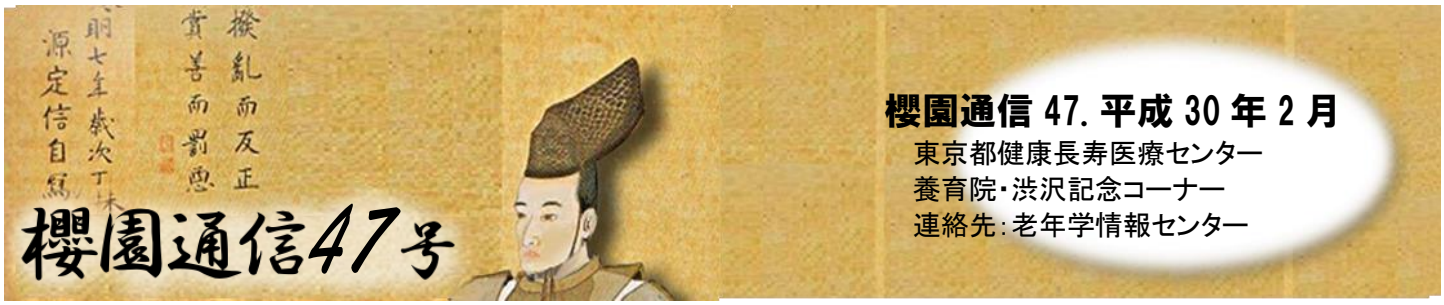
松平楽翁公の逸事について	佐久間長敬
松平楽翁公の逸事	戸川残花
所謂田沼執政時代に就いて	辻善之助
白河楽翁公と水戸文公	栗田勤

第３巻（大正７年～10 年）

松平の対外政策	井之邊茂雄
考古学上より見たる楽翁公	沼田頼輔
楽翁公の人格	三上参次
賢宰相楽翁公	黒坂勝美
楽翁公の心事	渋澤栄一
楽翁公の犠牲的精神	渋澤栄一

第４巻（大正 11 年～昭和 10 年）

孔子教より見たる楽翁公	宇野哲人
寛政の治について	滝　粛
白河楽翁公の遺著	渋澤栄一
経済史上より見たる白河楽翁公	中村孝也
楽翁公の寛政医学の禁について	花見朔巳
楽翁公の住吉奉・百種和歌に就いて	渋澤栄一
楽翁公に対する誤解	平泉　澄
楽翁公の壁書に就いて	渋澤栄一
白河楽翁公の伝記編纂について	渋澤栄一
徳川家康公と白河楽翁公	高柳光寿
松平楽翁公記念会に就いて	渋澤栄一
楽翁公の政治について	岩橋小耶太
皇国精神と楽翁公	松平稲吉



養育院の原資・松平定信の七分積金について

稲松孝思（顧問医）

松平定信（白河楽翁 1759*－1829）について

父は御三卿田安宗武。徳川吉宗の孫。安永3(1774)年陸奥国白河藩主松平定邦の養子となる。兄が亡くなり、絶家の危機の田安家への復帰は実現しなかった。養子に出し、復帰を妨げたのは、田沼意次の策略といわれる。

天明 3(1783)年白河藩主となり、天明飢饉に餓死者を出さず名君と讃えられた。

天明 6 年将軍徳川家治が亡くなり、一橋家の 15 歳の家斉が将軍となった。定信が田安家にいれば将軍になった可能性は十分にあり、将軍になり損ねたといえる。

天明７年江戸の大規模な打ちこわしを引き金に田沼派が失脚すると、老中に就任し、翌年、幼い家斉将軍を補佐し幕府の全権を掌握、寛政の改革を推進した。

大飢饉、百姓一揆・打ちこわしの激化、農村荒廃、幕府の財政危機、ロシアの接近など内外の深刻な危機打開のため、自分と妻子の命を賭けるとの決意を込めて難局に当たった（吉祥院歓喜天請願書）。

寛政の改革について

荒廃農村の再建、飢饉対策の米備蓄、七分金積立と町会所設立、人足寄場設置などの社会政策を採用した。

棄捐令により、困窮した旗本、御家人を救済。また、朱子学を正学とする寛政異学の禁を出し、湯島の聖堂を幕府の学問所として整備拡充し幕臣教育に当たらせ、医学館、和学講談所の整備など文教を重視。大政委任論を表明し、朝廷との関係を明確にして、京都御所再建では朝廷側の復古的造営要求に応えて幕府権威の強化をはかる一方、尊号事件では天皇の要求を拒否して公家を処罰した。

ロシア使節ラクスマンの通商要求に、鎖国は祖法であると表明し、江戸湾防備計画を自ら視察して立案。また北方防備のため北国郡代の新設など国防体制を模索。財政節減のため朝鮮通信使の延期・対馬聘礼も決定した。その政策には当初強い支持が集まったが、大奥などから次第に反発も強まり、しかも将軍家斉が成人し補佐役定信としっくり行かなくなり、寛政 5(1793)年辞職した。

老中失脚後の定信は、白河藩の藩政に専念する。幕政は定信の意を組んだ老中が運営、幕末まで影響力を残した。隠居後白河楽翁を名乗り、江戸に住んだが、浴恩園（現築地市場）を中心に文化活動に励み、多数の著書を残している。この間の文政 6（1823）年、松平藩は白河から桑名に転封となり、幕末に至った。

七分積金―町会所制度について

七分積金－町会所制度の成立、運用については、安達憲忠、川崎房五郎らの文献に詳しい。要するに天明の飢饉後の政情、米価の不安定に対し、寛政 2（1790）年に老中松平定信により構想が打ち出され、寛政 4（1792）年に町会所の籾倉の運用が始められた制度である。すなわち、自治、祭礼など町方の行事のために家持町人から徴収されていた町入用を節約させ、その７割に、幕府資金２万両を加え、籾の備蓄を行い、飢饉、災害時に困窮者の救済に備えたものである。その徴収と運用は、町の用達商人の自治組織である町会所で行い、幕府の町方勘定は立ち会うのみであった。幕末までに、向柳原、筋違い大橋内、深川大橋内、小菅村などに合わせて 43 棟の籾倉を運用し、また、土地を担保にした富商の金融資金として利用された。救済的土木事業なども行い、福祉的な制度としてはそれまでの世界に類をみないものであり、今日の福祉事業の魁（さきがけ）を成すものである。この制度は、明治三年まで引き続き、困窮者救済基金として莫大な額となっていた。

七分積金蓄積財産の明治政府への移管

大政奉還、鳥羽伏見戦争などの激しい政局の中で、江戸幕府は幕を下ろすことになるが、この局面で収拾にあたったのが、隠居して一翁を名乗っていた大久保忠寛である。左遷の身から、鳥羽伏見戦争後の事態収拾のため、徳川慶喜に会計総裁、若年寄（この時期老中は空席で実質的に事務を総攬する立場）に任じられ、勝海舟の背後にあって、江戸開城の実務を果たすことになる。いわゆる江戸無血開城時、田安家の徳川慶頼、若年寄の大久保一翁、陸軍総裁勝海舟は、大総督府に江戸の治安、静寛院（和宮）の安全確保を託され、上野戦争開戦まで、江戸の治安維持の責任も持つことになる。また、いわゆる無血開城時、徳川幕府の事務の代表として、幕府権力・財産、の大総督府への移管を果たすのである。また、上記の七分積金は、もともと町人のものであり、制度は従来通り運用することになった。

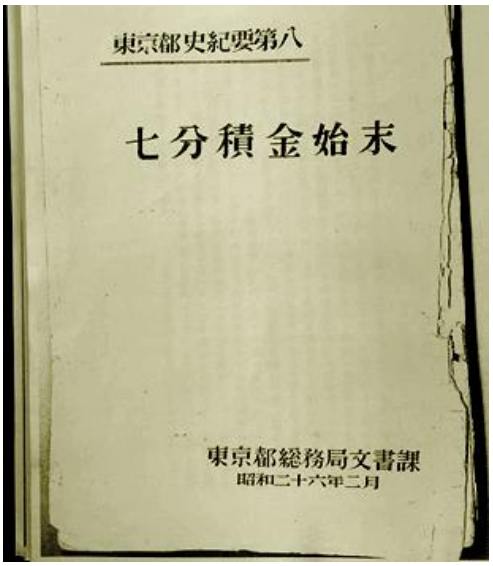
明治元（1867）年５月、鎮台府官吏の立会いで点検された、七分積金で蓄積された金穀は以下のとおりである。玄米296余石、白米193余石、籾320,710石余、現金 31,195 両余、貸付滞金 207,675 両余、別段貸付金 25,000 両、附属地 100 箇所余。上地 1,705 箇所（その後担保として得た土地は地租改正で名義獲得）。

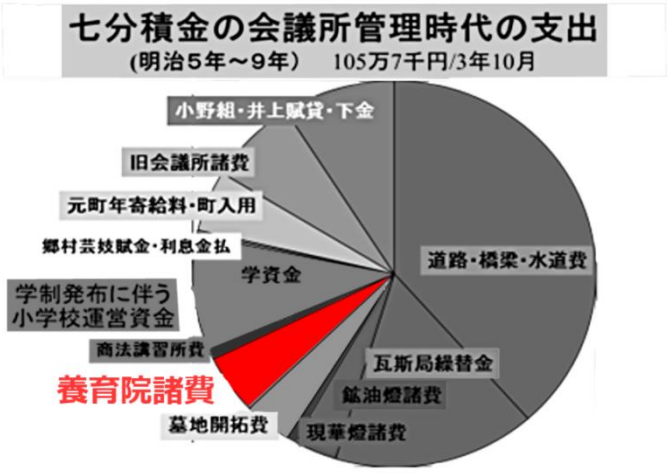
江戸幕府からこれらの財産・制度がそっくり明治政府に引き継がれたのである。

明治維新後の七分積金（共有金）の利用

昭和 30 年代に川崎房五郎氏の手になる『七分積金始末』と題されたガリ版刷りの古い史料がある。後に、東京都から出版された東京都市紀要『七分積金』のもとになるものである。この本に七分積金の収支がくわしく記載されている。

幕末までに莫大なものとなった七分積金の金穀は、明治２-３（1869-70）年の三田、高輪、麹町の救育所の運用に使われるなど、厳密に救貧目的に使用されている。一部は戊辰戦争の戦費として貸し出されているが、その後返金されている。明治 5（1872）年に大蔵大輔・井上馨の内諭により、町会所・七分積金は、営繕会議所・共有金に名前を変え、橋梁建設、瓦斯灯建設などの都市基盤建設にも使用されることになった。





上記の円グラフは、共有金と名前を変えた後の使途をまとめたものである。学制発布時の東京の小学校制度の立ち上げ、養育院設立、商法講習所運営、公共墓地開拓など、大久保一翁府知事の府政の中で使用されている。馬車の普及による橋梁や道路の損傷対策、夜の東京を明るくするための街灯建設など、文明開化への渋沢の夢の実現にも利用されている。このとき渋沢は明治政府の大蔵省・改正掛長であり、井上馨の腹心の部下である。

渋沢は大蔵省退官後、明治７年からは、大久保府知事に、この共有金の運用を託されている。このことが、渋沢栄一が生涯にわたって“養育院”にこだわり続けるきっかけとなっている。

画期的だった 養育院附属病院の リハビリテーション導入

櫻園通信 48. 平成 30 年 2 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

山本信行
介護老人保健施設 四季の里

昭和 47（1972）年頃の養育院附属病院：現在の東京都健康長寿医療センターの沿革は、明治５年に設立された『養育院』に遡ります。その時代ごとの社会的要請に応じて福祉・医療の役割を担ってきました。今から半世紀近く前になりますが、1970 年頃、将来の高齢者時代を見据えた東京都の方針転換で、養育院の運営形態が大きく変わりました。それまで養育院の施設利用者を主な対象とした養育院附属病院は、一般都民に開かれた高齢者専門の病院に転換し、老人総合研究所を併設、従来からの老人施設も拡充する方向になったのです。このための新病院の役割として、高齢者を対象としたレベルの高い医学知識の蓄積、治療レベルの向上でした、そのための人材の確保、最新医学検査機器の導入でした。また、当時まだ知られていなかったリハビリテーション医学を重視し、アメリカで専門医として活躍していた荻島先生、ＰＴ、ＯＴ、ＳＴ、心理士の導入でした。このときＰＴとして活躍した山本さんが、当時のことを紹介してくれました。〔稲松孝思〕

私は昭和 47 年。**東京都養育院附属病院**開設時、理学療法士の養成学校に入学しました。

昭和 50 年卒業時、先輩に**「65 歳以上はリハビリの適応ではない」**と言われた私は、65 歳以上を対象とした病院に就職しました。

小児・成人は将来があり、リハビリで回復させる意味があるが、老人は先が無くリハビリを行っても意味が無いと専門職でも考える者がいた時代です。

配属されたのが、リハビリテーション（リハ）部**理学療法（PT）**科でした。

1 名の PT 採用すら困難と言われた時代に、10 名を超える PT だけでなく、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、義肢装具制作士がおり、それぞれに広い訓練室が用意されていただけではなくすでに、リハの中にデイホスピタル（今の通所リハ）がありました。

当時、リハは医療行為の後に位置すると考えられていましたが。**なんとそのリハが病院の 1 階に**、一般診療外来が 2 階にありました。

老人リハの中心が、地方の温泉病院であった時代に、**リハを前面に押し出した老人の総合病院**がなぜ都心にできたのか？この疑問を解き明かしてみたいと思い、当時の状況を調べてみました。

◆

老人のリハは、脳卒中から始まり、当時は肺炎で亡くなられる者が多かったが、抗生物質が普及してからは、命が助かった後も、3 ヶ月間の安静を必要とすると考えられていました。そのために、寝たきりによる拘縮、褥瘡など廃用症候群や残された麻痺への対応が問題となっていました。脳卒中リハは、昭和 31 年鹿教湯温泉療養所からとされ、昭和 49 年診療報酬改定まで診療報酬はほとんど無いに等しかったようです。

リハを行うには、広い訓練室とリハ職を雇う必要があり、都心では、地価が高く老人リハの病院は建設が困難であったため地価が安く、生活費、人件費の安い地方の温泉地に老人リハ病院は作られたようです。

欧米ではリハは都市型でした。それは、欧米の病院が国公立、協会などの非営利組織によるものが基本であったためで、日本では病院数の８割、病床数の９割を民間病院が占め、民間での都市型は採算がとれないためでした。

都市型リハ病院がなぜ必要であったのか。

脳卒中後リハを行うため、地方の温泉病院に移送するには、それに耐えるだけの身体的条件が満たされるまで待つ必要がありました。

その間に廃用（過度の安静・運動不足による心身の機能低下）が進み、転院後も廃用の回復から始めなくてはならないため、温泉病院での入院期間も長くなりました。

退院後都心からの外来通院は困難であるため、自宅復帰までの回復にはより長い入院期間を要しました。この為入院待ちの待機患者も増加しました。また、退院後の職場復帰、地域社会復帰の課題に直接対応できなくなっていきました。

都市型のリハ病院であれば、早期からリハを始められ、退院後外来通院が可能であり、職場復帰、地域社会復帰に対応が可能になりました。

都心に老人総合病院を作っても、リハが無ければ、寝たきりで、自宅退院ができない患者で占め、病院が機能しなくなる可能性があったとも考えられます。

75 歳以上の老人医療費無料化を行なった美濃部都知事の時代、板橋キャンパスには約 1 万坪の土地がありました。人が集まる場所で、人件費、収益の補填を非営利組織の東京都であれば可能であったことから、リハ機能を持った病院を都心で作ることが出来たと考えられます。

◆

当時を知る蔵本先生（元病院長）によれば、東京都の新規事業として、昭和 43 年施設内診療所から都民に開かれた老人専門病院の設立が計画されたそうです。

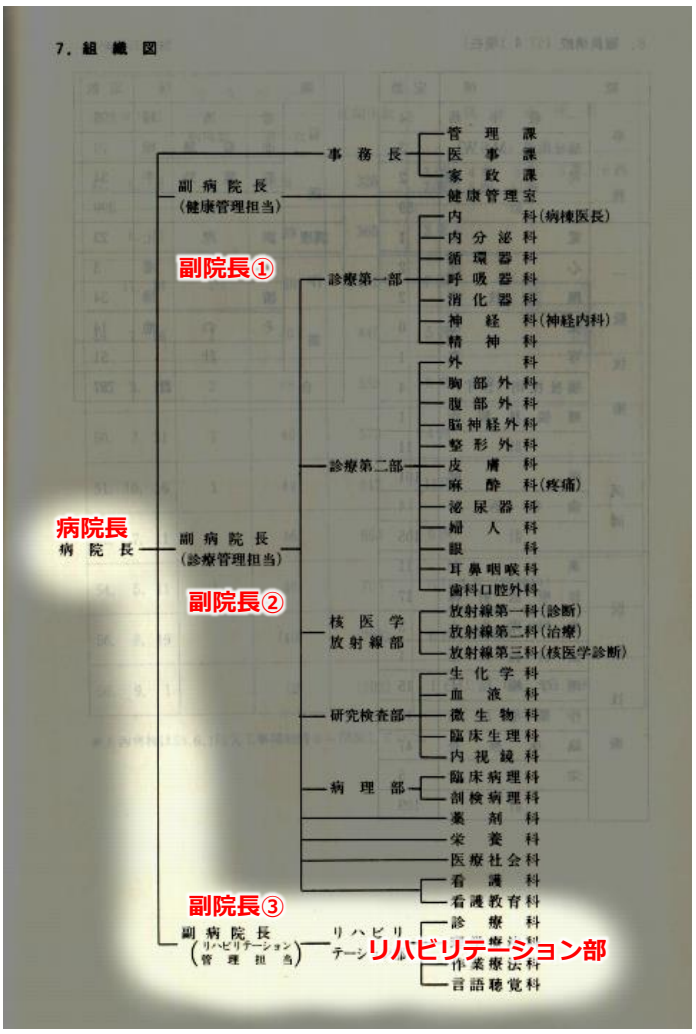
新しい病院では、元々あった第一診療部（内科系）、第二診療部（外科系）以外に、新規事業とし研究検査部、核医学放射線部、リハビリテーション部の設置が計画されました。

リハビリテーション部はこれからの高齢者の増加に伴って、その自立機能を保持する重要性が認識され、**総合的なリハビリ部門**が計画されたと伺いました。

リハビリ病棟の浴室

撮影
昭和 47 年

リハビリ ADL 室

リハビリテーション部の位置づけ

「東京都養育院附属病院-最近 10 年の歩み-」（昭和 58 年）より